

JMOOC 日本語講座「NIHONGO Starter」の開発と運用

The Development and Operations of “NIHONGO Starter”, a JMOOC for Japanese Language Learning

国際交流基金日本語国際センター
(The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Urawa)

キーワード：JMOOC、eラーニング教材、入門レベル、JF 日本語教育スタンダード、
Can-do、外国人留学生獲得戦略

1. はじめに

2014年4月、オンライン日本語講座「NIHONGO Starter (にほんごにゅうもん)」がJMOOC (Japan Massive Open Online Courses) ⁽¹⁾の一講座としてスタートした。これは、国際交流基金日本語国際センターが放送大学と共同で開発した電子書籍型のeラーニング教材を使用した講座で、誰でも無料で受講することができる。

この講座の開発は、当初、留学生の受け入れを積極的に行っている日本国内の大学への貢献を目的として、日本語を解さない留学予定者が来日前に現地で独学で学べる日本語学習教材を制作するという放送大学の企画から始まった。その背景には、近年、文部科学省による留学生30万人計画、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業、大学の世界展開力強化事業等の大学国際化政策が推進されていることがある。

本稿では、この「NIHONGO Starter」の講座および教材の開発について紹介し、併せて公開後の運用状況について報告する。

2. 講座のしくみ

本講座の受講は、まず、「NIHONGO Starter」のFacebookグループに参加登録し、参加の許可を得た後、グループページで電子書籍をダウンロードする（または、Web版を使用する）というプロセスで開始する。後述する練習問題(Exercise)やCan-doの自己評価(Can-do Check)を行うにはインターネットへの接続が必要であるが、それによって学習履歴や成績が外部のサーバーに蓄積され、各課を修了すると、Web上で電子バッジが授与される。全ての課が修了し、10個のバッジが集まるとコース修了バッジが授与され、さらに希望者には修了証が送付される。

また、講座には、SNS上に作られた学習コミュニティや言語別のフォーラムがあり、受講者が質問をしたり、自由な意見交換をしたりできるようになっている。



図1 教材のしくみ

3. 教材の概要

3.1 教材の方針

上述の経緯から、主として身近な場所に日本語学習機関や教師が見つけれられない、または多忙で定期的に学習する時間が無い学習者を対象とすることから、本教材は、①時間や場所を問わないこと、②独学が可能なこと、③最後まで継続できること、を制作方針とした。

まず、いつでもどこでも学習できることを目指し、教材は、パソコンだけでなく、携帯電話やタブレット端末にダウンロードして使用できるよう、NPO 法人 CCC-TIES⁽²⁾が開発した「CHiLO Book」⁽³⁾と呼ばれる電子書籍型の教材を用いることとした。次に、独学用として、教師や補助教材の助けを借りずに学習できる教材を目指し、指示や解説は英語で行い、ナビゲーター役のキャラクターを設置した。また、画面上に黒板の役割を果たす動画を配し、解説と併用して確認できるようにしたほか、各課のはじめに目標を明確に提示し、最後には自己評価で自身の達成度がわかるようにしている。そして、独学の場合、途中でやめてしまう学習者が少なくないことから、楽しみながら最後まで続けられる教材を目指し、教材の中心となるスキットのストーリーにゆるやかな連続性を持たせることで、次の回を続けて見たいくなるよう工夫し、各課のコーナーにはバラエティのあるコンテンツを配した。

3.2 教材のシラバス

シラバスには、「JF 日本語教育スタンダード」⁽⁴⁾を用いており、各課の目標となる Can-do や学習項目、さらに練習問題のコンテンツはこのスタンダードに準拠した教材『まるごと 日本のことばと文化』(入門 A1 かつどう) および『同』(入門 A1 りかい)を参考にしている⁽⁵⁾。

表1：各課のタイトルと Can-do

Lesson	タイトル	Can-do
1	こんにちは	①あいさつを します ②にほんごを よみます
2	もういちど おねがいします	①けんきゅうしつで はなします ②なまえと くのを かきます
3	どうぞ よろしく	①じぶんの ことを かんたんに はなします ②めいしを よみます
4	かぞくは 3にんです	①かぞくの ことを かんたんに はなします ②かぞくの しゃしんを みて はなします
5	なにが すきですか	①すきな たべものが なにか はなします ②あさごはんの しゅうかんについて はなします
6	どこで たべますか	①ひるごはんを どこで いっしょに たべるか ともだちと はなします ②メニューを よみます ③しょくどうで かんたんな ちゅうもんを します
7	へやが 4つ あります	①どんな いえに すんで いるか いいます ②いえに なにか あるか いいます ③ともだちを いえに しょうたいする Eメールを かきます
8	いい へやですね	①ものを へやの どこに おくか ききます／いいます ②いえを ほうもんします／いえに ともだちを むかえます
9	なんじに おきますか	①なにかを する じかんを いいます ②いちにちの せいかつを はなします
10	いつが いいですか	①パーティーを いつに するか はなします ②パースデーカードを かきます

3.3 各課の構成

本教材は全10課からなり、各課の学習時間は45分程度である。学習者が取り組みやすいようコーナーを細分化し、さらに1ページを数分でこなせるようにして、細切れの時間を積み重ねることで学習できるようにしている。各課の構成は次のようになっている。

- (1) Skit (①各課の Can-do の提示と動機づけ、②スキット (動画)、③Can-do の確認 (気づき))
- (2) Explanation (表現や文法の解説)
- (3) Exercise (表現や文法の練習問題)
- (4) Can-do Practice ((1)③の活動を登場人物と一緒に練習)
- (5) Can-do Challenge ((1)③の活動に一人で挑戦)
- (6) Can-do Check (自己評価)
- (7) Learn More (文化等についてのコラム、参考資料)

3.4 教材の詳細

(1) Skit

スキットに先立ち、まず、ナビゲーター役のロボット「ロボじい」が Can-do を提示し、動機付けのための質問をする。その後、ドラマ仕立てのスキットを見る。登場人物はロボット研究のために日本の大学院に留学しているブラジル人留学生と彼を受け入れる研究室の仲間及び教授、学食のおばさんである。研究活動を英語などで行う学生にとっても必要な、大学生活で使う日本語を取り上げている。約3分間のスキットを見た後、スキットの中の Can-do に関係する部分を再生し、Can-do を達成するためにどのような表現が使われていたか確認する。



図2 <Skit>の例

(2) Explanation

<Skit>で使われていた表現や文法を「ロボじい」が解説する。Can-do を達成するために使う表現・文法が中心で、英語による解説文に、音声や黒板の役割を果たす動画を加えている。

(3) Exercise

<Explanation>で学習した表現や文法が理解できたかどうか、練習問題で確認する。この部分はオンラインで行うようになっており、自分のアカウントに学習履歴が残る。75%以上正解すれば「合格」となる。

(4) Can-do Practice

Can-do を達成するための練習のコーナー。主に語彙や文法などの言語能力を問う<Exercise>に対し、ここでは実際に言語活動（パフォーマンス）を行う練習に取り組む。<Skit>の中で登場人物がCan-do を遂行している部分を切り出した動画を使用し、画面に「Speak!」の文字が表示されたら登場人物と一緒に発話する。

(5) Can-do Challenge

自分ひとりで Can-do が達成できるかどうか試すコーナー。<Can-do Practice>では登場人物と同じ発話で練習を行ったが、ここでは、画面上に「Your Turn!」の文字が表示されたら、何を言ったらよいのか自分自身で考えて話す。



図3 <Can-do Practice>の例



図4 <Can-do Challenge>

(6) Can-do Check

<Can-do Challenge>で行った活動を振り返り、Can-do ができたかどうか自ら3段階（「★：しました」「★★：できました」「★★★：よくできました」）で評価する。★が2つ以上で「合格」となる。

(7) Learn More

コラム「Language and Culture」や、<Skit>のスク립ト（英語・ローマ字・かな）、ひらがな表などの参考資料が掲載されている。

4. 学習コミュニティ

MOOC 共通の課題として、受講者が講座の最後まで取り組むことができるかという継続性の問題がある。本講座についても、やはり、この継続性が一番の課題である。特に、本講座は常時インターネットに接続できる環境がない受講者にも便宜を図るために、電子書籍型というスタイルを取っており、最新のインターアクションを組み込む仕組みはあえて行わず、修了認定に直接結びつく Can-do 評価も、自己評価のみに任せることとした。その結果、意識の高い受講者でないと、自分の力の伸びを把握し、その達成感を次の学習意欲に結びつけることが難しいという問題が生じている。

この継続性の課題に取り組むため、本講座では、学習コミュニティの活性化に力を注いだ。まず、Facebook 上に受講者が集える場を作った。そして、講座の講師陣が、このページに書き込まれる質問に対し、適宜、回答を書き込むようにした。たとえば、教材の内容や進め方についての質問には、できるだけすばやく対応する一方、勉強方法や学習の困難さなどについての相談には、しばらく他の受講者からの投稿を待つようにした。彼らの中で、活発なやりとりが生まれることで、学習コミュニティが自主的に運営されていくことも目指したいと考えたからである。また、受講者がまだ取り組んでいない教材の内容に興味を持たせたり、自己評価で終わっている学習成果を互いに披露し合えるような書き込みを促したりすることも行った。さらに、言語別のフォーラム（掲示板）も開設した。ここでは、自分の母語や使用可能な言語でやりとりができるため、細かいやりとりが活発に行われ、その中から、毎週、同じ曜日の同じ時間に Skype を使って日本語の会話をしてみようとか、スペイン語の翻訳版を作ろう、という自主グループも出てきた。

5. 公開後の運用状況

5.1 受講者の概要

公開は2014年4月から始め、2016年3月までに7回開講した。教材の配信方法として、①1週間に2課ずつダウンロードできるような設定（5週間で配信終了、10週間で講座（ネット接続による練習問題の回答や修了バッジの取得）終了）、②1週間に1課ずつダウンロードできるような設定（10週間で配信・講座終了）、③開講と同時に全課のダウンロードが可能な設定（10週間で講座終了）の3種

類を試行したが、現在は、①の方式に落ち着いている。

7回の講座で、教材をダウンロードした学習者は20,806人、そのうち、正式に受講登録をした学習者は2,241人である。登録地（在住地）の多かった上位10か国は、①日本、②オーストラリア、③米国、④フィリピン、⑤コロンビア、⑥クロアチア、⑦セルビア、⑧オランダ、⑨インドネシア、⑩ブルガリアであるが、登録がFacebookによるためか、講座の回によって、盛り上がりの見られる地域が異なった。男女比はほぼ同じであり、年齢は20代から30代前半が多い。学習コミュニティのFacebookに書き込みを行った受講者は1,792人、言語別フォーラムでやりとりを行った受講者は、英語が153人、スペイン語が58人、アラビア語が23人である。このコミュニティを熱心に利用するかどうかは、ほぼ同様のサポートをしても、回によって、かなり反応度が異なった。その理由を明確にするには今後の分析が必要であるが、現時点で見られる傾向は、以下の2点である。

- (1) 当然ではあるが、参加人数が多い回ほど、参加者からの書き込み、こちらからの書き込みへの返信が（参加人数比以上に）増える。
- (2) 積極的に書き込みをする少しレベルが上の参加者が数名いると、全体を引っ張ってくれる力になる。受講者同士で助け合う風潮が見られるようになり、コミュニティも活気づく。また、こうした経験をした受講者の中からは、講座終了後も、次の回やその次の回ぐらいまで、事実上のチューターの役割を果たしてくれるメンバーも出てくる。

5.2 講座運営から見てきたこと

この講座は、元々、日本の大学や大学院に留学を予定している学生が、来日前に少しでも日本の生活や日常生活の日本語に慣れることを目指して開発された。ただ、登録時にFacebookに書き込まれた自己紹介を見ると、アニメ、漫画、または伝統的な文化などを通して、日本や日本語に興味を持つようになったり、テレビや書籍等を通して日本人の考え方やしつけ、信念などに魅かれたりしたことで、いつか日本語を勉強したいと思っていたものの、なかなか時間的、または場所的にその機会に恵まれなかったという受講者も多く、言わば潜在的な「現在の日本に関心を持つ」層の人たちに働きかけることにもなったことがわかる。このような不特定多数の人たちへの働きかけは、MOOCによる無償のオンライン講座の意義の一つでもあると言える。特に今回のようなごく入門レベルの講座は、既に日本への留学を決めている学習者の予習的な意味合いはもちろんのこと、それまで具体的には留学先や訪問先を決めていなかった学習者を日本にいざなうことができる可能性も秘めていると言えよう。

一方、本来の対象者であった留学予定者にとって、この講座での学習がどの程度役に立っているかは、今後も追跡して調査を行う必要がある。特に、一番の課題である継続性については、受講者に意欲を持ち続けさせるために、各課や全講座の修了者に、何を以て喜びを感じさせることができるか、または、どんなチャンスを提供することができるか、ということのを再考することが重要であろう。たとえば、講座スタッフや教師からの報酬だけでなく、受講者同士が讃えあったり、ほめあったりする

ことのできる相互評価の可能性も、もう一つの外発的な報酬として、組み込んでいくことが有益と考えられる。また、評価システム自体を多様にして、学習開始時に、受講者個人が、自分の学習目的にしたがって、自分はどの方法でどの力を評価してもらいたいのか、または自分で評価したいかを選ばせるような方法も考えられよう。

理工系をはじめとして、英語ができれば研究生活や最低限の学生生活は不自由がない留学生たちにとっては日本語の習得は不要だという考え方は、昨今、かなり見直されつつある。留学生の積極的な受け入れ、その数の確保という観点から見ると、確かに、来日前に日本語をある程度以上習得していることを期待することは難しいが、やはり、来日した後に、なんとか周りの人々とコミュニケーションをとろうとしたり、何らかの方法で日本語を少しでも学ぼうとしたりする姿勢を持ってもらうことは、相互交流を通じた人材育成という視点では大変重要なことと考えられる。当人にとっても周囲の人々にとっても、その機会を逸するのは勿体ない。自国の生活の中では、日本語学校に通うことも日本語の教材を入手することもたやすくはない学生にとって、せめて、来日後の日本での人々との交流に向けた第一歩を踏み出す自信を持てること、日本や日本人に対する心理的な壁を外すことに貢献できれば、本講座の意義は小さくないのではないかと考えている。

註：本稿は「国際交流基金日本語教育紀要」⁽⁶⁾で発表された内容に加筆修正したものである。

〔注〕

- (1) 2012年にアメリカで立ち上がったMOOCの日本版。MOOCとはMassive Open Online Courses（大規模公開オンライン講座）の略で、オンラインで公開された講座をだれでも無料で受講でき、修了条件を満たすと修了証が取得できるサービスである。2013年には日本版MOOCの普及を目指し、日本の大学・企業の連合組織として「一般社団法人日本オープンオンライン教育推進協議会（略称JM00C）」が設立された。
- (2) 特定非営利活動法人サイバー・キャンパス・コンソーシアムTIESの略称（<http://www.cccties.org/>）。eラーニングの手法と技術を活用した教育の改善・充実の実現に関する事業を行っている。
- (3) ビデオやオンラインテストが組み込まれたマルチメディア教科書。LMS（学習管理システム）やSNSと連携することで、電子書籍をポータルとしたインタラクティブな学習環境を実現している。
- (4) 国際交流基金がヨーロッパのCEFRを参考に開発した、日本語の教え方、学び方、学習の評価のし方を考えるためのツール。日本語の熟達度をCan-do（「～できる」）の形で表している。このスタンダードに準拠したコースブックとして『まるごと 日本のことばと文化』シリーズ（独立行政法人国際交流基金編著）がある。
- (5) 解説部分は、国際交流基金マドリード日本文化センターが作成した『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 文法解説書』も参考にした。
- (6) 篠原亜紀・築島史恵（2015）「オンライン日本語講座「NIHONGO Starter」－電子書籍型教材の開発と運用－」『国際交流基金日本語教育紀要』第11号、53-66、国際交流基金

〔参考文献〕

国際交流基金 (2013) 『まるごと 日本のことばと文化』 (入門 A1 かつどう)

————— (2013) 『まるごと 日本のことばと文化』 (入門 A1 りかい)

————— (2014) 『JF 日本語教育スタンダード 2010』 第三版

JMOOC 公式サイト <<http://www.jmooc.jp/>>

NIHONGO Starter Facebook ページ <<https://www.facebook.com/nihongostarter>>

NPO 法人 CCC-TIES 「TIES シンポジウム: オープンエデュケーションに直面する日本の大学 —Post MOOC

と CHiLO の可能性—報告」 <<http://www.cccties.org/news/n20140614/>>

OUJ MOOC ポータルサイト <<http://dev.chilos.jp/>>